

私を育てた もう一つの居場所

この先の未来も 繋がっていたい

小学2年生の時、学校で配られたキャスト募集のチラシを見て「やってみたい」と思い、母に相談して入団。みのゝれ住民劇団「演劇ファミリーMyu」のメンバーで石岡市にお住まいの高校生、高野優美さんにインタビューします。



みのゝれ住民劇団 演劇ファミリーMyu

たかの ゆみ
高野優美さん

みのゝれと共に生活するスタイル

Minole Life
のすすめ

No.226

「当時は何でもやってみたい子でした」と笑います。小学生の頃は歌やダンス、芝居の練習に夢中になりました。

その中でも一番好きになったのは芝居でした。進学した中学校には演劇部がありませんでした。高校は「演劇部のある学校に行きたい」と自分で決めて進学。高校演劇では役者だけでなく、照明や大道具など舞台づくり全体を経験しています。

「照明操作は、役者として舞台に立っているときよりも緊張しました。Myuで照明を担当している皆さんは本当にすごいと思います」。役者だけでは見えなかった舞台の裏側を知ったことで、作品づくりの奥深さを実感したそうです。

初舞台は2022年。みの

ゝれ15歳記念作品「まんまるムーン」でした。「照明がキラツと光った瞬間『この場所最高』って思ったんです」。舞台に立つ緊張感も、お客さんの前で演じる高揚感も、高野さんにとって特別な時間になりました。

10月公演「クロノポスト」の挨拶どこかのだれかさま」ではスタッフとして参加しています。キャストから相談を受けることもあり、一緒に考えながら舞台を支えています。「スタッフも楽しいですが、やっぱり私は役者が好きですね」と語るその言葉には、舞台への変わらない思いが込められています。

高野さんにとってMyuは、演劇を学ぶ場所というだけではありません。「みのゝれに来ると、嫌なことも忘れられるんです」。小学生の頃から通い続けているからこそ、年齢を超えて何でも話せる大切な仲間の存在に感

謝しています。「もしあの時、チラシを見ていなかったら、今の私はなかったかもしれない」。大学へ進学しても、みのゝれとのつながりは続けたいと話します。キャストとして舞台に立てなくても、公演を観たり、スタッフとして関わったり、自分らしい形でこの場所とつながっていたいと考えています。

「私にとってMyuは、育ての親みたいな存在」と高野さん。たくさんの人に支えられながら育った場所だからこそ、今度は自分が誰かを支える側になっていきたい。そんな思いも少しずつ芽生えています。

「クロノポスト」の挨拶どこかのだれかさま」は、「時を超える世界を描いた不思議な雰囲気魅力です。ダンスや群舞も見どころなので、ぜひ楽しみにしていてください」と笑顔で話してくれました。

(藤田佐知子)